

国立国語研究所学術情報リポジトリ

The acquisition of deictic demonstratives between learning Japanese as a second and as a foreign language : The case of Taiwanese learners of Japanese

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 孫, 愛維, Sun, Ay-wei メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001860

[研究論文]

第二言語及び外国語としての日本語学習者における現場指示の習得
—台湾人の日本語学習者を対象に—

The acquisition of deictic demonstratives between learning Japanese
as a second and as a foreign language:
the case of Taiwanese learners of Japanese

孫 愛維

Sun, Ay-wei

要旨

本研究では、第二言語及び外国語として日本語を学ぶ台湾人学習者における現場指示用法の習得について、学習環境が及ぼす影響を質問紙調査により探った。その結果、「独立的現場指示のコ」及び「相対的現場指示の対立型のコ」は、JSLとJFLとの間で習得のされ方に差は見られなかったが、それ以外は、JSLはJFLより現場指示の習得が早く進むことがわかった。JFLはJSLより母語の知識と教室指導に影響されやすく、「誤用のコ」と「誤用のソ」を多く産出した。また、日本語総合能力も併せて検討したところ、JSLにおいては、下位レベルの学習者において既に高い正用率を示しており、上位レベルの間には有意差が見られなかったが、JFLにおいては、下位レベルの学習者には誤用が多く見られ、完全に習得されるとは言えないことがわかった。以上から、目標言語圏で勉強することは現場指示の習得を促進することが示唆された。

キーワード：指示 現場指示 学習環境 日本語総合能力 台湾人の学習者

1. はじめに

指示詞は事物を指し示す機能を持ち、言語に普遍的に存在している基本的な語であるが、指示詞の使い分けの背景にある認知の仕方は言語によって異なり、一旦母語として習得されると根強く定着する（吉田，1980）。このように、既に母語指示体系が確立された学習者にとって、第二言語の指示詞の習得が難しいことは容易に推測でき、重要な研究対象となっている（森塚，2003）。日本語学習者の指示詞の習得についても様々な観点（学習者の母語、言語能力など）から活発に議論されている。しかしながら、日本国内で日本語を勉強している学習者（第二言語としての日本語学習者，以下JSL）を対象とした研究（守屋，1992；迫田，1998）で報告された結果は、自分の母国で日本語を学習している学習者（外国語としての日本語学習者，以下JFL）を対象とした研究（安，1999，2000；単，2003）と必ずしも一致していないにもかかわらず、学習環境が指示詞の習得に及ぼす影響についての研究は行われていない。

そこで、本研究では学習環境が異なる台湾人学習者（JSL・JFL）を対象に指示詞の基礎とされる現場指示の習得状況を調査し、現場指示の習得における学習環境の影響について検討する。

2. 先行研究と研究課題

現場指示とは、話し手が視界内の事物を指差しなどによって示す用法である。中国語母語話者を対象とした現場指示の習得研究としては、守屋（1992）、迫田（1998）、安（1999、2000）、単（2003）などが挙げられる。以下、それらの研究で得られた知見の中から、本研究と関連する部分を取り上げて概観していく。

守屋（1992）は、母語の指示体系が現場指示の習得に影響を与えるか否かを観察するため、クローズテストを利用し、JSLの中国語話者、ドイツ語話者、英語話者、韓国語話者を対象者として調査した。その結果、母語の違いに関係なく、学習者が初級教育で取り上げられる現場指示用法を理解し、十分定着していることを主張した。

迫田（1998）は、日本語能力が中級か上級か、及び母語の指示体系が日本語の「コ、ソ、ア」のような三項対立か、あるいは中国語の「這、那」のような二項対立かを独立変数として穴埋めテストを行い、JSL学習者の現場指示の習得を調査した。その結果、学習者の母語を問わず、上級と中級の間に有意差が見られず、中級において既に85%を超える極めて高い正答率を示すことから、初級から中級の間で現場指示に関してはほぼ習得がなされると結論付け、守屋の結果を支持している。

しかし、JFLの中国語母語話者の日本語学習者を対象として、三肢選択の指示詞質問紙調査を実施した安（1999、2000）と単（2003）では、守屋、迫田と異なる結果を報告している。安も単も、中国人学習者の現場指示に関する知識は、日本語能力が発達しても日中対応関係にずれがある「ソ」と「ア」に関しては誤用が多く見られ、完全に習得されるとは言えないことを明らかにした。

以上のように、いずれも母語指示体系が二項対立である中国語の母語話者を対象とした研究であるにもかかわらず、一貫した見解は得られていない。守屋と迫田では研究対象がJSL、安と単ではJFLであることから、結果の相違は学習者が置かれた学習環境に起因する可能性がある。しかし、これまでの現場指示の習得研究においては、JSLとJFLを同時に比較・検討する研究はまだ行われていないため、この結果の違いが学習環境に起因するものであるかどうかは明らかではない。そのため、学習環境の現場指示習得における役割について調査する必要がある。また、現場指示の習得は日本語総合能力に応じて変化する可能性があるため、学習環境の影響を調査する際に、日本語総合能力もあわせて検討することが必要であろう。

そこで本研究は、「台湾の国語」¹（以下、中国語）を母語とする台湾人の日本語学習者を対象に、学習環境（JSL・JFL）、日本語総合能力（上位・下位）を独立変数として現場指示

の習得状況に焦点を当てて検討する。研究課題は、「学習環境が現場指示の習得に影響するか、もし影響するとすればその影響は日本語総合能力と関係があるか」である。

3. 研究方法

3.1 対象者

JSL：日本に留学後、本格的に日本語教育を開始した台湾人日本語学習者86名で、日本語学習歴は8ヶ月～2年、年齢は20～30代である。ところで、Collentine (2004) は、学習している言語が日常的に使われる環境にいる第二言語学習者とそうではない外国語学習者における最も大きな相違は、教室外における母語話者とのやりとりの有無であると述べている。しかし、必ずしも全ての第二言語学習者に教室外で母語話者との会話の機会があるとは限らず、その機会の有無が言語習得の効果に影響する可能性がある (Wilkinson, 1998)。そのため、本調査では「日本語教師以外に、普段よくコミュニケーションしている日本人がいない」と回答した22名を分析対象から省いた。その結果、最終的な分析対象は64名となった。JSLの教室場面では、教師は主に日本語母語話者で、教室内の言語は日本語を中心とする。

JFL：台湾の大学で日本語を専攻する2年生及び3年生の学生で、調査実施時点での日本語学習歴は1～2年、年齢は20歳前後、日本に留学、「遊学」²などで長期滞在した経験がない103名である。そのうち、回答が不完全な対象者、及びSPOT³得点が60点満点中20点以下の対象者を除いた結果、分析対象は98名となった。JFLの教室では、教師は日本語母語話者と中国語母語話者の両者で、教室内の言語は日本語と中国語である。

対象者の日本語総合能力を測定するため、SPOTを実施し、JFL得点の中央値を境に上位・下位に二分した。その結果、JSL上位33名(男8・女25)、JFL上位49名(男6・女43)、JSL下位31名(男14・女17)、JFL下位49名(男5・女44)となった。全体、上位、下位それぞれのSPOT得点についてt検定を行い、10%有意水準で見えていくと、JSL全体とJFL全体、JSL上位とJFL上位、JSL下位とJFL下位のすべてにおいて群間に有意な差は見られず($t(160) = 0.79$, $p = 0.43$, n.s., $t(80) = 1.31$, $p = 0.19$, n.s., $t(78) = 0.17$, $p = 0.87$, n.s.)⁴、両群の日本語総合能力は同等のレベルであると仮定できる。なお、平均日本語学習歴は、JSL上位19.15ヶ月、JFL上位23.25ヶ月、JSL下位11.0ヶ月、JFL下位16.35ヶ月である。以上の内容を表1にまとめる。

[表1: JSL・JFL学習者SPOT得点(満点60点)と日本語学習歴]

	人数・性別	最大値	最小値	平均値	標準偏差	学習歴(月数)
JSL上位	33 (男8・女25)	60	41	50.27	5.76	19.15
JFL上位	49 (男6・女43)	60	42	48.33	4.50	23.25
JSL下位	31 (男14・女17)	40	22	30.35	5.86	11.00
JFL下位	49 (男5・女44)	41	20	30.10	6.93	16.35
JSL全体	64 (男22・女42)	60	22	40.63	11.57	15.20
JFL全体	98 (男11・女87)	60	20	39.21	10.85	19.80

3.2 調査

3.2.1 分析の枠組みについて—中国語の指示詞「這・那」との対照を兼ねて—

日本語指示詞に関する研究はかなりの数にのぼり、指示用法の捉え方は研究者及び研究目的によって多様であり、統一されていない。その一つである宋（1991）の枠組みは、日本語教育のために話し手、聞き手、指示対象との三者の関係を考慮して作られたものである。これは「日本語教師がコソアを指導する際の指針にしたり、学習者が用法を整理したり、研究者が多肢選択問題を作成する際の基準にしたりするのに適している」（森塚，2003：66）と評価され、各指示用法で使用可能な指示系列を明確に提示し、現場指示の全体を見通せるようになってきているため、本研究は宋（1991）の枠組みを援用する。宋（1991）の枠組みにおける各指示用法の定義、例文、中国語との対応を表2に示す。なお、それぞれの指示用法とそれに使用可能な指示詞をまとめると、「独立的現場指示のコ」、「独立的現場指示のア」、「相対的現場指示の融合型のコ」、「相対的現場指示の融合型のソ」、「相対的現場指示の融合型のア」、「相対的現場指示の対立型のコ」、「相対的現場指示の対立型のソ」となるが、記述の便宜のために、表と図では「独コ」、「独ア」、「融コ」、「融ソ」、「融ア」、「対コ」、「対ソ」と略することにする。

[表2: 宋（1991: 139）の枠組み（筆者加筆）²⁾

指示用法	場の状況	指示詞	例文	中国語
独立的現場指示	相手(聞き手)がいない	独コ	(玄関の前にある黒い箱を触りながら、一人でつぶやく) これは何だ。	這
		独ア	(空を飛んでいる鳥を見上げながら、一人でつぶやく) 僕もあの鳥のように飛ぶことができれば…	這, 那
相対的現場指示の融合型	話し手と聞き手が我々意識を持つ	融コ	(A, B両者の手元にある一つの人形を指しながら) A: これは誰の人形ですか。 B: これは妹の人形です。	這
		融ソ	お客: その煉瓦の建物の前に停めてください。 運転手: その角のところですね。	這, 那
		融ア	(空に飛んでいる飛行機を指しながら) 子: あれが飛行機なの。 母: そうよ, あれが飛行機だよ。	這, 那
相対的現場指示の対立型	話し手と聞き手が対立意識を持つ	対コ	(講演中講師が一冊の本を聴衆に見せながら) 講師: この本を見ると総べてのことが分かります。 聴衆中の一人: 先生, その本いくらですか。	這
		対ソ	(講演中講師が一冊の本を聴衆に見せながら) 講師: この本を見ると総べてのことが分かります。 聴衆中の一人: 先生, その本いくらですか。	這, 那

以下、本研究の対象者の母語である中国語と対照しながら、指示用法ごとに説明していく。

独立的現場指示は、聞き手が存在せず、話し手が独自に知覚する空間的指示対象を「遠・近」の差によって指し示すものである。大抵、自分の手が届く範囲は「近」と見なし、「コ」が

用いられ、それより遠ければ「遠」と見られ、「ア」を使用するとされている（宋，1991：140）。中国語の場合では、外山（1994：3）は、「コ」系は「這」、「ア」系は「那」で表されると報告しているが、木村（1992：195）でも示されるように、独り言の場合は話し手の意識によって「ワレの領域（自分の領域）」内のものと認知される傾向が強いため「ア」系は「這」で表現することが多い。

相対的現場指示の融合型は、話し手と聞き手が同時に存在し、両者の領域が融合することによって、「我々」という領域を作る指示用法である。我々に近いものを「コ」で表し、我々から遠くにあると認めた場合「ア」で表す。指示対象が漠然とした場所にある場合、あるいは「ア」で指すには近すぎる場合は、「ソ」を用いる（宋，1991：141）。一方、中国語では、話し手の主観的心理要因が優先され、心理的に遠い存在だと認識されない限り、「這」が用いられる（木村，1992：187）。

相対的現場指示の対立型は、話し手と聞き手がそれぞれの領域を作り、各々の領域が対立しているものである。話し手が自分の領域内にあるものを指す場合は「コ」系が用いられるが、指示対象が相手の領域内にある時は「ソ」系で表される⁶（宋，1991：143）。日中対応関係について、外山（1994：4）は、「コ」系はほぼ「這」に対応するが、「ソ」系に関しては、「這」、「那」両方が使用可能であると述べている。聞き手の領域を意識しながら「コ」と「ソ」を使い分ける日本語に対して、中国語では、話し手の主観的な心理要因による影響が大きく、聞き手の領域を話し手の領域に取り込み、「這」を用いがちだと指摘している。

以上から、「コ」系は中国語の近称の「這」と対応しているが、「ソ」と「ア」系は中国語指示詞の「這」と「那」のいずれにも対応できるため、日中指示詞の対応関係は一对一对応ではないことがわかる。また、「這」は日本語の非現場指示用法すべてに対応しており、「那」より使用範囲が広いということがわかる。

3.2.2 質問紙の内容

1. 指示詞三肢選択問題

宋（1991）の枠組みに基づき、先行研究で用いられた調査文と漫画から指示詞が使われている文を抽出し、指示詞三肢選択問題を作成した。日本語母語話者が複数回答可能な問題文は正誤の判断が難しくなるため、日本語母語話者17名⁷に予備調査を実施し、母語話者の指示詞の選択が一致した問題文のみ採用した。予備調査では、「相対的現場指示の融合型のソ」の項目で使い分けに揺れが見られたため、調査対象外にした。学習者の負担と調査の効率を配慮し、一つの指示用法につき3～4問ずつ配置し、全部で20問設けた。各問題文はランダムに配置して質問紙を作成した。問題文の内容を対象者に正確に理解させるため、難しいと推定される単語に中国語訳を付け加え、分からない表現は自由に調査者に質問するよう指示した。回答時間には制限を設けなかった。表3に単語の翻訳を除く問題文の内容と指示詞の中国語訳を提示する。下線は三肢選択の部分、「」は問題文の出典である。

[表3: 問題文の内容と指示詞の中国語訳]

指示詞	番号	問題文	中国語
独コ	問1	(靴を履きながら、一人で) この靴、だいぶ古くなったなあ。 「安、2000:123」	這
	問2	(机の上にあるバッグを持ち上げながら、一人で) これ、誰のかなあ。 「安、2000:123」	這
	問3	(Aはパチンコ屋でお金を使い果たして、自分の胸に手をあてて一人で) A: この胸の痛みは幻のようなものだ。 「漫画」	這
独ア	問4	(高層ビルの屋上から、道路に止まっているバスを見ながら、一人で) あのバス、何か故障があるかなあ。 「安、2000:123の例文を一部修正」	這、那
	問5	(空を飛んでいる飛行機を指しながら、一人で) あの飛行機はどこに行くんだろう。 「安、2000:123」	這、那
	問6	(展望台から海に浮いている船を見ながら、一人で) あの船、何人くらい乗っているのかなあ。 「安、2000:123」	這、那
融コ	問7	(二人で猫を触りながら) A: この猫、何歳? B: この猫はね、もうすぐ十歳だよ。 「安、2000:123の例文を一部修正」	這
	問8	(二人で猫を触りながら) A: この猫、何歳? B: この猫はね、もうすぐ十歳だよ。 「安、2000:123の例文を一部修正」	這
	問9	(子どもは運転している親に乗っている車について話しかける) 子: ねえ、ママ、この車って安い車なの。 親: この車はね、中古車なの。 「漫画」	這
	問10	(子どもは運転している親に乗っている車について話しかける) 子: ねえ、ママ、この車って安い車なの。 親: この車はね、中古車なの。 「漫画」	這
融ア	問11	(空を飛んでいる熱気球を指しながら) 子: あれが熱気球なの。 母: そうよ。あれを熱気球っていうのよ。 「安、2000:123の例文を一部修正」	這、那
	問12	(空を飛んでいる熱気球を指しながら) 子: あれが熱気球なの。 母: そうよ。あれを熱気球っていうのよ。「安、2000:123の例文を一部修正」	這、那
	問13	(AとBが頂点に着いた大観覧車の窓から地面にある車を指しながら) A: あの車、かっこいい。 B: えっ、あの赤い車が。 「安、2000:123の例文を一部修正」	這、那
	問14	(AとBが頂点に着いた大観覧車の窓から地面にある車を指しながら) A: あの車、かっこいい。 B: えっ、あの赤い車が。 「安、2000:123の例文を一部修正」	這、那
対コ	問15	(AはBの背中を搔いている) A: 痒いのはここですか。 B: いや、そこじゃない。もっと下。 「井上、2002:20の例文を一部修正」	這
	問16	(病院で) 医者: (患者の腹部を押さえながら) ここ痛みますか。 患者: そこはそれほどではありません。 「安、1999:2の例文を一部修正」	這
	問17	(夫は妻の化粧を見て、びっくり) 夫: なんだよ、その眉は 妻: ええー? だって今はやっているのよ、こういう眉。 「漫画」	這
対ソ	問18	(AはBの背中を搔いている) A: 痒いのはここですか。 B: いや、そこじゃない。もっと下。 「井上、2002:20の例文を一部修正」	這、那
	問19	(病院で) 医者: (患者の腹部を押さえながら) ここ痛みますか。 患者: そこはそれほどではありません。 「安、1999:2の例文を一部修正」	這、那
	問20	(夫は妻の化粧を見て、びっくり) 夫: なんだよ、その眉は? 妻: ええー? だって今はやっているのよ、こういう眉。 「漫画」	這、那

2. フェイスシート

学習者の置かれている学習環境を把握するため、日本語学習機関、日本語教科書、学習年数、滞在年数、頻繁にインターアクションする日本人の有無などについてフェイスシートを作成し回答を得た。

3.3 分析手法

JSL・JFLそれぞれの上位・下位ごとに、指示用法別に正用及び誤用²種の出現度数をクロス集計し、 χ^2 検定を行う。10%水準で有意差が検出された場合には、残差分析により、どこに差が存在するのかを明らかにする。

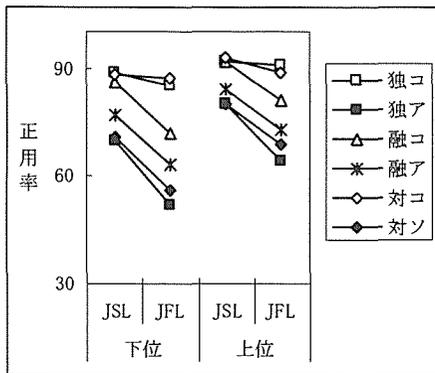
4. 結果

表4は指示用法ごとにJSL下位、JSL上位、JFL下位、JFL上位それぞれの回答数をまとめたもので、指示用法別の平均正用率をグラフにすると図1と図2のようになる。

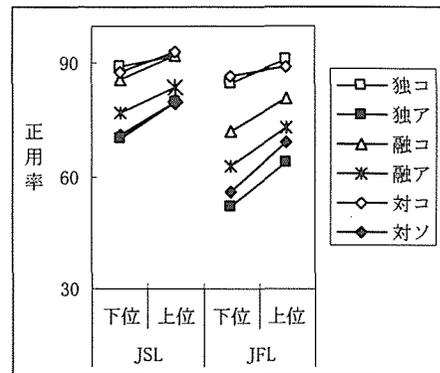
[表4: JSLとJFLの回答数]

	回答	JSL (N=64)		JFL (N=98)	
		下位 (N=31)	上位 (N=33)	下位 (N=49)	上位 (N=49)
独コ (三問)	コ	83 (89%)	92 (93%)	125 (85%)	134 (91%)
	ソ	6 (6%)	4 (4%)	13 (9%)	7 (5%)
	ア	4 (4%)	3 (3%)	9 (6%)	6 (4%)
独ア (三問)	コ	10 (11%)	4 (4%)	29 (20%)	20 (13%)
	ソ	18 (19%)	16 (16%)	42 (28%)	33 (23%)
	ア	65 (70%)	79 (80%)	76 (52%)	94 (64%)
融コ (四問)	コ	106 (86%)	122 (92%)	142 (72%)	159 (81%)
	ソ	11 (9%)	6 (5%)	42 (22%)	23 (12%)
	ア	7 (5%)	4 (3%)	12 (6%)	14 (7%)
融ア (四問)	コ	2 (1%)	0 (0%)	12 (6%)	6 (3%)
	ソ	27 (22%)	21 (16%)	60 (31%)	47 (24%)
	ア	95 (77%)	111 (84%)	124 (63%)	143 (73%)
対コ (三問)	コ	81 (87%)	92 (93%)	128 (87%)	131 (89%)
	ソ	7 (8%)	6 (6%)	16 (11%)	14 (10%)
	ア	5 (5%)	1 (1%)	3 (2%)	2 (1%)
対ソ (三問)	コ	11 (12%)	6 (6%)	37 (25%)	20 (14%)
	ソ	66 (71%)	79 (80%)	83 (56%)	101 (69%)
	ア	16 (17%)	14 (14%)	27 (18%)	26 (17%)

(N：人数、網掛け部分は正解の項目を示す)



[図1: 日本語能力別のJSLとJFLの比較]



[図2: 学習環境別の上位と下位の比較]

記述の便宜上、本研究では誤用について以下のように定義する。

誤用のコ：本来「ソ、ア」系を使用すべき場合に「コ」系を使用したもの。

誤用のソ：本来「コ、ア」系を使用すべき場合に「ソ」系を使用したもの。

誤用のア：本来「コ、ソ」系を使用すべき場合に「ア」系を使用したもの。

以下、各指示用法別に結果を見ていく。

4.1 独立的現場指示

4.1.1 独立的現場指示のコ系

日本語総合能力別によるJSLとJFLの比較に関しては、下位、上位ともに、JSLとJFLの間で人数の有意な偏りはなかった（下位： $\chi^2(2) = 0.88$, $p = 0.64$, n.s.；上位： $\chi^2(2) = 0.27$, $p = 0.87$, n.s.）⁹。

学習環境別による上位と下位の比較に関しては、JSL、JFLともに日本語総合能力による差は見られなかった（JSL： $\chi^2(2) = 0.82$, $p = 0.66$, n.s.；JFL： $\chi^2(2) = 2.71$, $p = 0.26$, n.s.）。

4.1.2 独立的現場指示のア系

日本語総合能力別によるJSLとJFLの比較に関しては、下位、上位ともに、JSLとJFLの間に有意な人数の偏りがあった（下位： $\chi^2(2) = 7.97$, $p = 0.02$, $p < .05$ ；上位： $\chi^2(2) = 8.84$, $p = 0.01$, $p < .05$ ）。残差分析により、下位、上位ともに、JSLはJFLより正用が有意に多く、JFLは「誤用のコ」が有意に多いことが示された（付録：残差一覧表の(1)、(2)を参照）。

学習環境別による上位と下位の比較に関しては、JSLでは日本語総合能力による差が見られなかったが、JFLでは上位と下位の間に有意な人数の偏りがあった（JSL： $\chi^2(2) = 3.87$, $p = 0.14$, n.s.；JFL： $\chi^2(2) = 4.64$, $p = 0.09$, $.05 < p < .10$ ）。残差分析により、JFL上位は正用が有意に多いことが示された（付録：残差一覧表の(3)を参照）。

4.2 相対的現場指示の融合型

4.2.1 相対的現場指示の融合型のコ系

日本語総合能力別によるJSLとJFLの比較に関しては、下位、上位ともに、JSLとJFLの間に有意な人数の偏りがあった（下位： $\chi^2(2) = 8.93$, $p = 0.01$, $p < .05$ ；上位： $\chi^2(2) = 8.22$, $p = 0.02$, $p < .05$ ）。残差分析により、下位、上位ともに、JSLはJFLより正用が有意に多く、JFLは「誤用のソ」が有意に多いことが示された（付録：残差一覧表の(4), (5)を参照）。

学習環境別による上位と下位の比較に関しては、JSLでは、日本語総合能力による差が見られなかったが、JFLでは、上位と下位の間に有意な人数の偏りがあった（JSL： $\chi^2(2) = 3.17$, $p = 0.21$, n.s.；JFL： $\chi^2(2) = 6.67$, $p = 0.04$, $p < .05$ ）。残差分析により、JFL上位は正用が有意に多く、JFL下位は「誤用のソ」が有意に多いことが示された（付録：残差一覧表の(6)を参照）。

4.2.2 相対的現場指示の融合型のア系

日本語総合能力別によるJSLとJFLの比較に関して、下位、上位ともに、JSLとJFLの間に有意な人数の偏りがあった（下位： $\chi^2(2) = 7.69$, $p = 0.02$, $p < .05$ ；上位： $\chi^2(2) = 7.78$, $p = 0.02$, $p < .05$ ）。残差分析により、下位、上位ともに、JSLはJFLより正用が有意に多く、JFLは「誤用のコ」と「誤用のソ」がともに有意に多いことが示された（付録：残差一覧表の(7), (8)を参照）。

学習環境別による上位と下位の比較について、JSLでは、日本語総合能力による差が見られなかったが、JFLでは、上位と下位の間に有意な人数の偏りがあった（JSL： $\chi^2(2) = 3.75$, $p = 0.15$, n.s.；JFL： $\chi^2(2) = 4.93$, $p = 0.08$, $.05 < p < .10$ ）。残差分析により、JFL上位は正用が有意に多いことが示された（付録：残差一覧表の(9)を参照）。

4.3 相対的現場指示の対立型

4.3.1 相対的現場指示の対立型のコ系

日本語総合能力別によるJSLとJFLの比較に関しては、下位、上位ともに、JSLとJFLの間で人数の有意な偏りはなかった（下位： $\chi^2(2) = 2.57$, $p = 0.28$, n.s.；上位： $\chi^2(2) = 1.03$, $p = 0.60$, n.s.）。

学習環境別による上位と下位の比較に関しては、JSL、JFLともに日本語総合能力による差は見られなかった（JSL： $\chi^2(2) = 3.26$, $p = 0.20$, n.s.；JFL： $\chi^2(2) = 0.37$, $p = 0.83$, n.s.）。

4.3.2 相対的現場指示の対立型のソ系

日本語総合能力別によるJSLとJFLの比較に関して、下位、上位ともに、JSLとJFLの間に有意な人数の偏りがあった（下位： $\chi^2(2) = 7.04$, $p = 0.03$, $p < .05$ ；上位： $\chi^2(2) = 4.64$, $p = 0.09$, $.05 < p < .10$ ）。残差分析により、下位、上位ともに、JSLはJFLより正用が有意に多く、

JFLは「誤用のコ」が有意に多いことが示された（付録：残差一覧表の（10），（11）を参照）。

学習環境別による上位と下位の比較に関して，JSLでは，日本語総合能力による差が見られなかったが，JFLでは，上位と下位の間に有意な人数の偏りがあった（JSL： $\chi^2(2) = 2.58$, $p = 0.27$, n.s.；JFL： $\chi^2(2) = 6.85$, $p = 0.03$, $p < .05$ ）。残差分析により，JFL上位は正用が有意に多く，JFL下位は「誤用のコ」が有意に多いことが示された（付録：残差一覧表（12）を参照）。

4.4 結果のまとめ

以上指示用法別に述べた結果をまとめると，表5のように示すことができる。

[表5: 結果のまとめ]

		日本語総合能力別の比較		学習環境別の比較	
		下位	上位	JSL	JFL
独コ	正用	JSL ≒ JFL	JSL ≒ JFL	上位 ≒ 下位	上位 ≒ 下位
	誤用				
独ア	正用	JSL > JFL	JSL > JFL	上位 ≒ 下位	上位 > 下位
	誤用	JFL：誤用のコ	JFL：誤用のコ		
融コ	正用	JSL > JFL	JSL > JFL	上位 ≒ 下位	上位 > 下位
	誤用	JFL：誤用のソ	JFL：誤用のソ		下位：誤用のソ
融ア	正用	JSL > JFL	JSL > JFL	上位 ≒ 下位	上位 > 下位
	誤用	JFL：誤用のコ・ソ	JFL：誤用のコ・ソ		
対コ	正用	JSL ≒ JFL	JSL ≒ JFL	上位 ≒ 下位	上位 ≒ 下位
	誤用				
対ソ	正用	JSL > JFL	JSL > JFL	上位 ≒ 下位	上位 > 下位
	誤用	JFL：誤用のコ	JFL：誤用のコ		下位：誤用のコ

(>: 有意差あり, ≒: 有意差なし, 誤用は有意に多いもの)

日本語総合能力別のJSL・JFLの各指示用法に関しては，「独立的現場指示のコ」，「相対的現場指示の対立型のコ」を除き，JSLはJFLより現場指示の正用が多いという結果となった。誤用については，JFLは「独立的現場指示のア」，「相対的現場指示の融合型のア」及び「相対的現場指示の対立型のソ」に「誤用のコ」が，「相対的現場指示の融合型のコ，ア」に「誤用のソ」が多く観察された。

次に，学習環境別の日本語総合能力上位と下位の各指示用法に関しては，JSLにおいては下位も現場指示の正用が多く，上位との間に大きな差が見られなかった。しかし，JFLでは，「独立的現場指示のコ」及び「相対的現場指示の対立型のコ」を除き，下位と上位との間に有意な差があり，下位は上位より「相対的現場指示の融合型のコ」に「誤用のソ」が，「相対的現場指示の対立型のソ」に「誤用のコ」が多く見られ，JSLとは異なる傾向が示された。以上のことから，現場指示の習得進度は学習環境に左右されることが示唆される。

5. 考察

本章では、学習環境が現場指示の習得に与える影響をより明確に把握するため、調査結果を「日本語総合能力別によるJSLとJFLの比較」及び「学習環境別による日本語総合能力上位と下位の比較」という二つの視点から、考察していく。

5.1 日本語総合能力別によるJSLとJFLの現場指示の習得の比較

5.1.1 正用について

「独立的現場指示のコ」, 「相対的現場指示の対立型のコ」を除き、日本語総合能力の上位・下位を問わず、JSLはJFLより正用が有意に多いことから、目標言語圏で学習することは現場指示の習得を促進すると推察される。一般的には、JSLとJFLでは使用する教科書、指導方法など多くの点で違いが想定されるが、本調査では、JSLとJFLとの間に教科書¹⁰、指導方法¹¹の顕著な違いは見られなかった。教室内と教室外の二つの学習環境で学べるという利点を持つJSLは、主に教室内学習に限定されるJFLより現場指示を習得しやすいと考えられる。また、教室内に限っても中国語と日本語をともに使用するJFLより、日本語の使用を中心とするJSLの方がさらされる日本語のインプットの量が多く、現場指示の習得が促進されると考えられる。

では、なぜ「独立的現場指示のコ」, 「相対的現場指示の対立型のコ」において、JSLとJFLの間に有意差が見られなかったのでしょうか。表2に示した通り、コ系は中国語の近称の「這」に対応しており、日中対応関係において、一対一の関係で容易に習得される指示用法と考えられ（安, 2000）、生のインプットが限られた外国語学習環境においても、第二言語学習環境で勉強する学習者に遜色なく身に付けられると考えられる。しかし、日中関係において同じ一対一の関係にある「相対的現場指示の融合型のコ」に関しては、JSLとJFLとで正用率に有意差が見られる。その原因については次節の5.1.2で考察する。

5.1.2 誤用について

全体的に誤用はJFLに多く見られた。特に「独立的現場指示のア」, 「相対的現場指示の融合型のア」, 「相対的現場指示の対立型のソ」に「誤用のコ」が、「相対的現場指示の融合型のコ」, 「ア」に「誤用のソ」が多いことが示された。以下では、JFLに誤用が多く見られた理由について考察する。

誤用のコ

「独立的現場指示のア」, 「相対的現場指示の融合型のア」, 「相対的現場指示の対立型のソ」においてJFL学習者に「誤用のコ」が多く見られた。その理由を中国語の指示詞の「這」との関連で考察したい。表2に示した通り、上記の指示用法は中国語の「這」と「那」両方に訳される。木村(1992:190)は、中国語の指示関係について、「聞き手」の領域を「話し手」

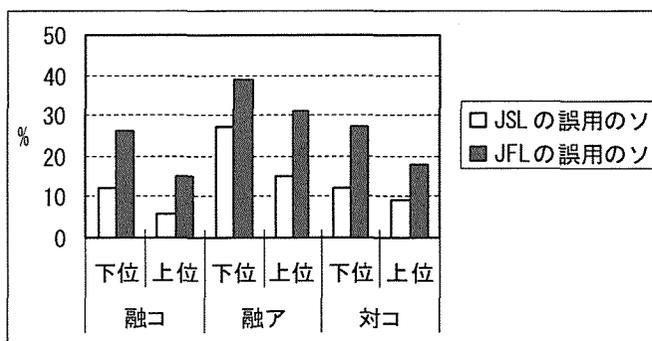
の領域に取り込み、「われわれ」という「包含視点」を利用するため、近称の「這」は遠称の「那」より使用頻度が高いと述べている。Odlin (1989) は言語転移に關与する要因として学習環境を挙げており、母語の転移はJSL・JFLといった学習環境に影響される可能性がある。外国語学習者が第二言語学習者に比べてより多く母語知識を転用する傾向は、JSLとJFLの「テイタ」の習得を研究した許 (2002)、また授受補助動詞を検討した尹 (2006) においても報告されており、普段、教室外で日本語母語話者と話す機会が少ないJFLはJSLより母語知識からの影響を受けやすいと言えるだろう。以上のことから、本研究のJFL対象者は中国語の「這」からの影響を受け、「誤用のコ」を多く産出したものと推察される。

誤用のソ

話し手の領域を聞き手と共用する「相対的現場指示の融合型のコ、ア」において、JFLはJSLより「誤用のソ」が多く見られた。その原因は教室内での指導の影響と考えられる。

JFLの日本語学習は主に教室内で行われるため、教室内での指導による影響が強いと考えられる。教室内で現場指示を学習する際、「教師:これはなんですか。学生:それはカバンです」といった練習ドリルが繰り返行われることが多いと思われる。安 (2000) は、こうした練習によって、学習者はコ系だけではなくそれ以外の指示系列で話しかけられたときでも会話参加者間の関係、指示対象との距離を考慮せずに、初級教育で取り上げられた典型例である「相対的現場指示の対立型」を喚起し、自動的にソ系で応答する習慣を形成してしまう可能性がある指摘した。一方、JSLの場合は、教室のみならず、教室外でも頻繁に日本語母語話者同士が行う会話を耳にしたり、日本語母語話者と会話を交わしたりする機会が多いため、様々な会話場面と接触することが考えられる。従って、JSLは話しかけられても即時にソ系で答える習慣は形成されていないと推測される。

以上の論述を検証するため、同じ調査の応答文 (問8, 10, 12, 14, 17) において、JSL・JFLが「誤用のソ」の選択した割合を図3にまとめた。「独立的現場指示」は独り言、応答文のうち「相対的現場指示の対立型のソ」(問18, 19)の正用はソであるため、分析対象外とした。



【図3: 問8, 10, 12, 14, 17におけるJSL・JFLが「誤用のソ」を選択した割合】

図3に示したように、JFLはJSLより「誤用のソ」を多く選んでいる。このように目標言語ルールを本来の適応範囲を越えて過剰に用いることについては、英語の第二言語習得の研究においても類似した傾向があると報告されている (Pica, 1983)。

5.2 学習環境別による日本語総合能力上位と下位の現場指示の習得の比較

JSLにおいては、下位でも正用が多いことを示し、上位と下位との間に有意差が見られなかったが、JFLでは、「独立的現場指示のコ」及び「相対的現場指示の対立型のコ」を除き、日本語能力による有意な差があるという結果が得られた。以上のことから、現場指示の習得の進度がJSL・JFLといった学習環境によって異なることが明らかになった。

第二言語学習者は外国語学習者より習得が早いという傾向は、話す能力を検討した Segalowitz & Freed (2004)、語彙量を調査した Milton & Meara (1995) などで報告されている。本研究の結果もこれらの先行研究と類似した傾向が見られたと言える。

JSLにおける学習の特徴は、日本語が取り巻く環境において学習することである。JSL学習者は、教室内での教師とのやりとりのみならず、教室外でも、日本語の学習の機会が豊富にあるため、学習者は多様な場面で指示詞と遭遇することで、その習得を促進させられる。そのため、日本語能力が下位の学習者でも現場指示を正しく使用している者が多いと考えられる。一方、JFL学習者はそのような機会が与えられないため、日本語能力が下位の学習者では、まだ現場指示が完全に習得されない。JFLでは、日本語能力全体の向上に従い現場指示の習得が進んでいくと推察される。

6. まとめと今後の課題

本研究は学習環境が現場指示の習得に影響するかどうかを明らかにすることを目的とし、第二言語及び外国語として日本語を学ぶ台湾人学習者を対象に調査を行った。その結果、次のことが明らかになった。

- ① 「独立的現場指示のコ」、「相対的現場指示の対立型のコ」を除き、日本語総合能力に関係なく、JSLはJFLより現場指示の習得が進んでいた。
- ② 誤用については、中国語による負の転移と推測される「誤用のコ」及び教室内での指導により誘発されたと思われる「誤用のソ」が、JFLで多く見られた。
- ③ 学習環境別に日本語総合能力が指示詞習得に与える影響を検討した結果、JSLにおいては、日本語総合能力の高低に関係なく、現場指示の習得度合いが比較的高かったのに対して、JFLにおいては、「独立的現場指示のコ」及び「相対的現場指示の対立型のコ」を除き、日本語総合能力による有意な差があり、JSLとは異なる傾向が示された。

本研究は現場指示の習得における学習環境の果たす役割の重要性を示すことができたが、今後の研究に向けて改善すべき点もあると思う。まず、本研究の調査方法に関しては、学習者に問題文を読ませ現場の状況を想定させ回答してもらったが、現場指示用法が「眼前

の指示対象をどう指示するか」という場面の用法である点を考えると、頭で想像させて回答させる方法が妥当であったかどうかが問題になると思われる。また、本研究においては、使用教科書の統制を行わなかったが、迫田（1998）で指摘されるように、教科書を含む教室指導が指示詞の習得に影響を与える可能性もある。今後は以上のような問題点に留意した上で、調査デザインを更に精緻化し、学習環境が現場指示の習得に与える影響について更なる検証を行っていきたい。

注

- 1 「台湾の国語」は北京語を基礎にした言葉で、指示詞は「這」と「那」で構成されている。
- 2 「遊学」とは、語学学校などの教育機関で勉強する短期留学の一種である。期間は通常に2週間から半年までである。
- 3 SPOTは「日本語能力簡易試験 (Simple Performance-Oriented Test)」の略語で、短時間で日本語能力を測定できるため、広く使用されている。音声テープを聴きながら回答用紙の空所にひらがな1字分を書き込ませるテストで、現在問題の難易度の異なる Version A-Gがある（小林，2005）。本研究では問題文の難易の幅が広い Version DとEを利用した。
- 4 $t()$ の中の数字は自由度， p は確率（偶然生起確率）， $n.s.$ は有意な差がないことを意味する。
- 5 指示詞，例文，中国語の部分は筆者の加筆である。
- 6 「講師：この本を見ると総べてのことが分かります。聴衆中の一人：先生，その本いくらですか。」この種の「そ」は文脈指示に属するという説もあるが，現場指示に属することを完全に否定することはできないため，本研究では現場指示とみなす。
- 7 日本人成人における指示詞の使用傾向を捉えるため，偏りなく各年齢層の日本人成人を対象者として調査を実施した。日本語母語話者の年齢と性別は以下の通りである。男性は20代3名，30代1名，40代1名，50代2名で，女性は20代3名，30代3名，40代1名，50代3名である。
- 8 本研究では，正答を正用と呼び，誤答を誤用と呼ぶこととする。
- 9 $\chi^2()$ の中の数字は自由度， p は確率（偶然生起確率）， $n.s.$ は有意な差がないことを意味する。
- 10 JSLが利用した教科書は『みんなの日本語』，『新文化初級日本語』，『新日本語の基礎』，『進学する人のための日本語初級』，『初級日本語』，その他（オリジナル教材）である。JFLが使用した教科書は『大家的日本語（『みんなの日本語』の中国語版）』，『新文化日本語（『新文化初級日本語』の中国語版）』，その他（オリジナル教材）である。
- 11 質問紙調査の後に，学習者にフォローアップインタビューを行い，指導方法について確認したところ，「オーディオ・リンガル」が中心であった。オーディオ・リンガルとは，

構造主義言語学と行動主義心理学に基づき開発された教授法である。口頭能力の育成には、パターン・プラクティス、文型練習などがよく行われる（高見沢，1989）。

参考文献

- 安龍洙（1999）「韓国入習者と中国人学習者の現場指示コソアの習得に関する一考察－相対的現場指示の対立型の場合－」『東北大学文学部言語科学論集』3, 1-12, 東北大学.
- 安龍洙（2000）「韓国入習者と中国人学習者の現場指示コソアに関する習得研究」『文化』64, 113-124, 東北大学文学会.
- 井上優（2002）『日本語文法のしくみ』研究社.
- 木村英樹（1992）「中国語指示詞の「遠近」対立について－「コソア」との対照を兼ねて－」『日本語と中国語の対照研究論文集（上）』181-211, くろしお出版.
- 小林典子（2005）「言語テストSPOTについて－用紙形式からWEB形式へ」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』20, 67-82, 筑波大学留学英センター.
- 許夏珮（2002）「日本語学習者によるテイタの習得に関する研究」『日本語教育』115, 41-50, 日本語教育学会.
- 迫田久美子（1998）『中間言語研究: 日本語学習者による指示詞コソアの習得』溪水社.
- 宋晩翼（1991）「日本語教育のための日韓指示詞の対照研究－「コ・ソ・ア」と「이・그・저」との用法について」『日本語教育』75, 136-152, 日本語教育学会.
- 外山美佐（1994）「日、中両語における指示詞の比較について」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』9, 1-18, 筑波大学留学生センター.
- 高見沢孟（1989）『新しい外国語教授法と日本語教育』アルク.
- 単娜（2003）「中国人学習者の指示詞「コソア」の習得に関する研究」お茶の水女子大学2002年度修士論文.
- 森塚千絵（2003）「指示詞コソアとその習得研究の概要」『第二言語習得・教育の研究最前線－2003年版－』51-76, 日本言語文化学会.
- 守屋三千代（1992）「日本語教育における文法教育の課題－習得状況からみた指示教育の問題点－」『日本語日本文学』2, 11-27, 創価大学日本語日本文学会.
- 尹喜貞（2006）「授受補助動詞の習得に日本語能力、及び学習環境が与える影響－韓国入習者を対象に」『日本語教育』130, 120-129, 日本語教育学会.
- 吉田集児（1980）「指示詞に見られる空間分割類型とその普遍性」『国立民族学博物館研究報告』5-4, 833-950, 国立民族学博物館.
- Collentine, J. (2004) The effects of learning contexts on morphosyntactic and lexical development. *Studies in Second Language Acquisition* 26-2, 227-248. Cambridge : Cambridge University Press.
- Milton, J. & Meara, P. (1995) How periods abroad affect vocabulary growth in a foreign language.

Odlin, T. (1989) *Language Transfer*. Cambridge : Cambridge University Press.

Pica, T. (1983) Adult acquisition English as a second language under different exposure. *Language Learning*, 33, 465-497.

Segalowitz, N. & Freed, B. (2004) Context, contact, and cognition in oral fluency acquisition: Learning Spanish in at home and study abroad contexts. *Studies in Second Language Acquisition*, 26-2, 173-199, Cambridge : Cambridge University Press.

Wilkinson, S.(1998) Study abroad from the participants' perspective: A challenge to common beliefs. *Foreign Language Annals*, 31-1, 23-39.

付録：残差一覧表

(1) 独立的現場指示のア

	コ	ソ	ア
JSL下	-1.84+	-1.61	2.79**
JFL下	1.84+	1.61	-2.79**

(2) 独立的現場指示のア

	コ	ソ	ア
JSL上	-2.48*	-1.21	2.67**
JFL上	2.48*	1.21	-2.67**

(3) 独立的現場指示のア

	コ	ソ	ア
JFL上	-1.41	-1.20	2.13*
JFL下	1.41	1.20	-2.13*

(4) 相対的現場指示の融合型のコ

	コ	ソ	ア
JSL下	2.72**	-2.94**	-0.18
JFL下	-2.72**	2.94**	0.18

(5) 相対的現場指示の融合型のコ

	コ	ソ	ア
JSL上	2.87**	-2.25*	-1.60
JFL上	-2.87**	2.25*	1.60

(6) 相対的現場指示の融合型のコ

	コ	ソ	ア
JFL上	2.03*	-2.58**	0.41
JFL下	-2.03*	2.58**	-0.41

(7) 相対的現場指示の融合型のア

	コ	ソ	ア
JSL下	-1.92+	-1.73+	2.50*
JFL下	1.92+	1.73+	-2.50*

(8) 相対的現場指示の融合型のア

	コ	ソ	ア
JSL上	-2.03*	-1.77+	2.37*
JFL上	2.03*	1.77+	-2.37*

(9) 相対的現場指示の融合型のア

	コ	ソ	ア
JFL上	-1.45	-1.47	2.06*
JFL下	1.45	1.47	-2.06*

(10) 相対的現場指示の対立型のソ

	コ	ソ	ア
JSL下	-2.52*	2.26*	-0.23
JFL下	2.52*	-2.26*	0.23

(11) 相対的現場指示の対立型のソ

	コ	ソ	ア
JSL上	-1.89+	1.93+	-0.74
JFL上	1.89+	-1.93+	0.74

(12) 相対的現場指示の対立型のソ

	コ	ソ	ア
JFL上	-2.51*	2.17*	-0.15
JFL下	2.51*	-2.17*	0.15

+p<.10 *p<.05 **p<.01